

道徳統計を介した教育の問題構成

— イギリスの 1830、40 年代の統計運動の一側面 —

上野 耕三郎

犯罪統計と教育

イギリスでの統計運動は 19 世紀前半に盛り上がりを見せたが、そのひとつの焦点は犯罪と教育との関連に絞られていた¹。当時、海を挟んだフランスではさまざまな場面で統計が用いられるようになり、その重要性を増しつつあった。なかでも注目に値すべきことは、「公教育のための闘いで統計が使われたことである。²」1816 年と 1821 年には法令によって小学校の児童数、その登録者数、さまざまな割合や分布を数え上げることが要求された。「これらの全面的な研究は 1829 年に最初に現われた。その結果、1831 年には文部省によって小学校統計として出版された。次のステップは、犯罪率と教育率を相関させ、必要ならば教育と逸脱につづく第 3 の規律要素である軍隊をデータとして用いることになった。³」統計的数値記録を導入し操作することで、教育と犯罪の間には密接な関係があり、教育は犯罪を減らす要因であり、教育と犯罪は反比例の関係にある、ということがくり返しくり返し主張されることになった。

ところがこの流れに棹さした人物がいたのであった。それがゲリ (A. M. Guerry) である。かれは 1829 年に「教育と犯罪に関する「比較統計学」の共同研究に参加し、これが 1832 年の道徳統計に関するはじめての主要著作に繋がった」のだが、そのなかで、「順序統計 (rank-order statistics) と呼ばれている統計を使って」、これまでの通説を論駁したのである。「まずは行政単位ごとの教育レベルが、軍の徴兵委員会の記録からはじき出される。この記録は、徴集兵の自己申告に基づく教育レベルを書き記したものである。行政

単位ごとの犯罪率の方は、1827-30年の司法省統計をもとにしている。行政単位は教育と犯罪のそれぞれについて順位づけされ、その結果ある地方の教育水準が高いほど、犯罪率も高いことが示されている。」この結論は陰影をつけられた地図と度数分布表でもって明らかにされたが、当時の人たちにとっては予想外のものであった。というのも「当時パリの人々は誰もが恐ろしい犯罪につきまといられていると思いこんでいた。……そのため、人々は自然に、労働者階級の墮落と無教養がその犯罪傾向の源、統計学者がいう「犯罪への傾向 (*penchant du crime*)」の源となっていると思い始めていた。ところが、ゲリはその逆を証明したように見えたのである。⁴」

犯罪は道徳的頹廢の明らかな指標であり、教育と犯罪は反比例する、というのがオーソドクシーであったが、ゲリは真正面からそれに挑んだのである。かれの小冊子は激しい狼狽を巻き起こした。海を挟んだイギリスの統計家たちは、すぐさま反撃に転じ、強迫観念に駆られたかのようにそのオーソドクシーを証明しようとした。

まずは1833年にグレッグ (W. R. Greg) がゲリへの攻撃の火蓋を切り⁵、1835年には攻撃の手を緩めることなく英国協会へと論文を提出した。これにポーター (G. R. Porter) が続いた⁶。さらに、かれの意見はローソン (Rawson Rawson) によって1840年にオウム返しのようにくり返された⁷。この時期に統計運動を担っていた人たちはどのような人たちであったのだろうか。ロンドン統計協会では、創設者らが37年から38年のセッションの開始までに表舞台から消え、それに代わって協会で力をもつようになったのは、「よりプロフェッショナルなグループ」(傍円強調引用者、以下同様) であり、「しばしばかなり年齢は若くて、(さまざまな改革組織や圧力団体にしばしば参加していたが、) 政治的に活動的のホイッグあるいはリベラルと一様に位置づけられることのない」人たちであった。かれらはマクリーン (Charles Hope Maclean) の後ろ盾のもと、ポーターやローソンによって指導されていた。かれらのリーダーシップのもと、統計協会は大きな一歩を踏み出し、委員会活動も創生期から第二段階へと、新たな時代へと突入することになった。新しい委員会の

最初のものは犯罪統計にかんするものであり、1837年1月に組織され、中心メンバーはポーター、ローソン、そしてレッドグレーヴ(Samuel Redgrave)であった。さらに、1837年から38年のセッションでは『統計協会雑誌』が発刊される運びとなり、ローソンは年75ポンドで有給の編集者に任命され、商務省の職務と兼務することになった。

1840年代の末にかけては、犯罪と教育との関係にかんする統計をめぐる活動は、法廷弁護士であったフレッチャー(Joseph Fletcher)の独壇場であった。1839年にマクリーンが死亡したあとに、かれはポーターとローソンによって後押しされ、協会における地歩を確固たるものにするが、ローソンの信頼あつい親友であり、役馬のような働き手として、ローソンの地位をほとんどといってよいほど引き継ぐことになった。1842年にローソンがカナダへと任地替えになった際には、協会雑誌の編集者をも引き継ぐことになった⁸。かれは二つの議会委員会——手職布工にかんする委員会と児童雇用委員会——の事務局長を務めた経歴を持ち、1844年には内外学校協会の学校査察を担当することになったが、全国を股にかけた査察を行ない、下層階層にかんする多くの情報や知識を集め、膨大な資料を駆使して「イングランドとウェールズの道徳統計」と題されたものにまとめ上げた。この仕事の頂点は1849年3月にアルバート公列席のもとでの会合で、ロンドン統計協会で発表された論文であった⁹。それは図表をともなった大部なもので、公刊された版は170頁以上にもわたっている。かれは「統計のパイオニア¹⁰」とも称されており、ひとたび視学官となるや、かれが書いた報告書は必要以上の長さになり、1846年には293頁にも及んだ。当時の人が言うには「統計家としてのフレッチャー氏の習慣は、そのような場合には往々にしてそうなるのだが、簡潔さがまったくなく、詳しさだけをあたえることになった。¹¹」「かれは自らの信念のはけ口をそのポストで見つけることになる。いみじくもリチャード・ジョンソンが上手く言い当てているが、「用心深いラディカル」であった。かれは熱烈な教育家であり、統計家であったし、1840年代の後半に教育統計を支配していた。¹²」ともあれ、ポーターやローソンによって主導された協会のルネッサン

スとも言うべき時期から、1852年にフレッチャーやポーターが亡くなるまで、「協会で支配的な人や態度にはかなりな継続性と安定性があった¹³⁾」のであり、この時期こそ「統計の時代」と呼ぶのにふさわしい時代であった。

事実！ 事実！ 事実！——統計は統治の礎石

統計家たちは闇雲に反撃に転じたわけではなく、グリと同じ土俵に立って相手とがっぷり四つに組む戦術をとった。相手を組み伏せ、自分たちの考えが正しいことを世間に認めさせるためには、数多くの事実を積み重ね、提示することが唯一の方策であった。そしてまた事実に基づくこと、それこそが英国協会そしてロンドン統計協会の規則であった。ポーターは言っている。

「社会経済と関連しているさまざまな問題が時々社会を震撼させることがあるが、それについての見解を披露したり、理非を議論することは、協会の統計部門のガイダンスに記されているルールに反するであろう。事実を公にすることはこれらのルール内に収まる。その事実の上に、事実のみの上に、これらの問題はまちがいがなく正しく位置づけられる。 mottoである“Aliis Exterendum (穀物をからざおでうつことを他の人に委ねる。転じて、統計家の役割をデータを収集することに限定し、その解釈は他の人に委ねる、という意味。)”はロンドン統計協会によって引き受けられたものであるが、私たちの目的を示しており、私たちの限界を定めており、穀倉に事実の束を提供するように私たちに求めている。他の人はそこから、社会の道徳的枠組みを育て維持する穀物を脱穀することになる。

私にはそう思えるが、統計部門の関心をこの時期にはとくに事実の検討に注ぐことができる。たいへん大きな問題が社会のすべての知識人の心を近年奮い立たせているが、その事実というのはその問題と直接にそして重要に結びついている。その問題とは、大衆のために健全な道徳教

育を提供するのに必要な手段を効果的に講じることで、犯罪記録に生じると期待されるであろう効果の問題である。

M. ゲリは最近「フランスの道徳統計小論」のなかである種の事実を提出したが、以前に、協会が組織されてまもない頃に、私はその事実についての検討結果をロンドン統計協会に提出したし、M. ゲリが行なったよりはもっと長い期間にわたる事実から、証明しようとしていた理論はまったく真理ではなく、前提から正しく導き出すことのできる結論と食い違っていることを示した。ひとつの事例にもとづいて理論をつくることはつねに危険であるに違いない。その指摘は道徳の問題にかんしてはとくに正しく、道徳は様々な妨害的要因によって影響を受けやすい。誤り避けるもっとも安全な手段として、そして確かさの点へと接近する唯一の方法として、事例を増やすようにあらゆる場合に私たちは望むべきである。¹⁴」

真理や事実は発見されるためにすでに存在しており、人がそれを発見するのを待っている、ということではない。世界はすでに分節化されて存在しているわけではなく、統計はすでに存在している事実の集積や発見ではない。そもそも私たちの世界で生じる出来事そのものは、私たちがいかにその出来事を理解し、それに対していかなる反応をすべきかを決めはしない。それをどのように理解し、それにたいしていかに反応すべきかを決めるのは、数え上げ、分類をするという、きわめて日常的な私たちの営為である。このような営為を介して、はじめて出来事は姿を現し、安定するのである。もう少し犯罪に引きつけて考えてみると、犯罪という事実そのもの、あるいは犯罪数や犯罪類型が対象として存在しているとすれば、それを対象として認識するまなざしや、それを対象として認知する力のメカニズムが存在していることが前提である。それなくしては犯罪は事実として客観性を保証されなかったはずである。犯罪も教育もそれ自身として客観性を保持しているわけではなく、問題構成の統制のもとに置かれ、問題構成の結果としてはじめて対象と

して存在することになったのである。この時期には犯罪や教育、そして貧困、病氣、自殺などもそうであるが、それらが統治のまなざしのもとに組み込まれ、議会の調査委員会や統計協会の調査などで証言が記され、数え上げられ、統計調査の対象となり、図表にされることで、はじめて対象として表象されることになったのである。統計や国勢調査をはじめとするさまざまな調査や、貧民の生活を探査する新しい技法こそが、はじめて事件や出来事を私たちが認識可能な形態へとつくりあげ、統治の対象として構成していったのである¹⁵。

このような統計への熱狂を好事家的な対応と考えるのはいささか的はずれであろう。ハッキングはケトレとファーに触れ、こう言っている。「彼らは労働者階級の人々を矯正したいと思っており、新しい種類の統制によってそれが可能になると考えていた。犯罪、疾病、売春、社会不安を支配する統計法則がどんなものであるのかを発見せよ。次にそれらの法則があてはまる前提を別のものにしてしまうような方策を見つけ出せ。¹⁶」したがって、「統計的熱狂は国家による明確な政治的対応を表象していた。自分の市民について多くを見いだし、そうすればその状態を改善し、その不穏な状態を減らし、その品性を強めることができる、と保守的な熱狂者は叫んでいた。統計はこの時期には道徳科学 (moral science) と呼ばれていた。すなわち、その目的は人口の道徳的状態についての情報と統制であった。その動機は純粋に慈善的であったが、既存の国家の維持を目指していた。¹⁷」

カオスの世界を調査し、数え上げ、それを印刷した数値にし、操作可能な形態にするという国家的な熱狂は、統治と緊密に結びついていった。統治が効率的に作用するためには、働きかけるべき領域あるいは問題についてのある種の知識や情報が不可欠であった。「統計調査ではいま指摘されたような法則を発見することに第一の重要性がある。法則はたいへん強力な要素の存在を証明するし、それはある特定の結果をもたらすことと関連するが、外的環境によって少しも影響されないし、あるいは乱されることのないものである。そういう外部の環境はいちどきれいに排除されると、改善可能となり、人々

の道徳・政治の状態を改善する実践的で、かなり利益ある様式へと導く。適切に決められた一連の結果、発展する一般の原理からのみ、効果的な立法は結果することができる。なんらかの数値的法則なくしては、これらの原理自体は比較的不明瞭であり、立法もつねに妨げられる。¹⁸「ある領域を統治するには、その真理を把握し、表象できることが必要であり、意識的政治的計算の領域にそれが入るような形式で表象されることが必要である。¹⁹」統治されるべき領域の表象は力による積極的な過程であり、数え上げ、書き入れることを媒介にして、「現実は安定し、動かすことができ、比較可能になり、結合可能になる。……この意味での情報は中立的に記録する機能の結果ではない。それ自体現実に関与するひとつの方法であり、問題となっている領域を評価し、数え上げ、そして関与可能なものにする様式で、現実を刻み込む (inscribe) 技法を生み出す方法である。²⁰」したがって、知識の集成はカオスの「世界を思考可能なものとし、それを思考の規律づけられた分析に服従させることで、扱うことのできない現実を飼い慣らす手続き形態をとるが、統治のための一種の知的装置 (傍点強調は原文ではイタリック、以下同様) を提供する。²¹」

フレッチャーは1847年に英国協会の統計部門の席で、イングランドとウェールズの犯罪統計にかんする報告をおこなったが、その大部の報告を次のようなことばで始めている。いささか長くなるが引用しておく。

「統計が無視されればされるほど、その結果の不完全さが明らかになる時代や国にたいする非難がよりいっそう大きくなる……。野蛮な状態では統計は存在するはずがない。というのも、粗野な専制政治は多くの質問を發することなく行動する。すこし進んだ社会状態では統計は不完全ながら統治の技法へと入ってくるが、それは危急に際して一般的真理として適用される、狭い経験からの性急な帰納という形である。近代文明という最高の状態でのみ、政府は広くそして洗練された観察によって大衆の本当の状態を知ろうとし続けている。個人の歴史においてと同様

に、社会の歴史においても、私たちの道徳的素質は本当は何か、私たち自身のふるまひの実際の過程は何か、私たち自身の行動の源泉は何か、と自らに問うのは、進歩のもっとも初期の段階ではけっしてない。しかし、そのように問うことが個人にとって不可欠であると同様に、全体としての社会にとっても不可欠である。……慈善や布教のしごとをする協会のほとんどは、この真理をその基礎としているし、監獄やワークハウスの改革規律のための法律や、公教育の発展のための法律にはこのことが感じられる。この場合でさえも技法の必要性が、そのような多様な他の領域でそうであると同様に、科学をその援助へと高めなければならなかった……。

個々人について実際に知っていることはたいへん不完全であるが、もっと不完全なものは、他人のなかに認め、評価している資質が、社会の大衆のなかで、場所で、そして階層の間で、それらはひとりの人による観察では手の届かないものであるが、いかに広まっているかを知らないことである。ひとりの人による観察の果実はどのように広まりを見せていようとも、たいへん明確な事実を網羅した正確さをもってはいない。政府によって限定された範囲ではあっても収集することのできる、全状態にかんしてのものであれ、ロンドンやマンチェスター統計協会のように、個人あるいは社会を犠牲にしても、割合としては限られた人口の部分に適用され詳細に集められた事実であれ、統計家が強い関心でもって見るのはそのような事実の収集である。これらの事実の人口調査は、そのことばを貶める意味で、調査的である、ということではない。そのことは、それぞれの国の精神や制度の自由按比例して、人口調査がより大がかりで、多様で、より簡単にできるようになっていることが証明している。²²」

この一節には「国家理性」や「ポリス」ということばこそ使われていないが、統治と知をめぐる歴史的経緯について触れられている。と同時に、調査

は統治の技法であり、統治には科学が不可欠の前提であることが直截的なもので述べられている。ここではそのことを確認するだけで充分であろう。

統計図表

少し先を急ぎすぎたかもしれない。ゲリへのリアクションへと話をもどすことにしよう。ポーターによれば、ゲリは単年度（1831年）のみの数値をもとにして犯罪と教育との関係を論じており、そのことが間違った結論へと導いたのである。ポーターは犯罪者自身の教育レベルにまで立ち戻って、ゲリへの反駁を試みた。フランスでは1828年から、起訴された人の教育程度を4種類（①読み書きできない。②読めるだけ、あるいは読み書きが満足にはできない。③読み書きが上手にできる。④初等学校で教えられている以上の教育を受けた。）に分けており、かれはこの統計を用いて数年間にわたる数値を採用することで、ゲリの説とは全くちがった結論を導き出すことになった²³。ひるがえって、イギリスの統計の現状をみると、犯罪統計は正確さと包括性を欠いており、ポーターらはその改善を企図し、力を尽くした。その甲斐もあって、1835年以降、カウンティ別、犯罪種類、刑期、性別によって分類された報告書が発刊される運びになった。犯罪者を教育程度——読み書きできない、読み書きが不完全である、読み書きが流ちょうである、高度な教育を受けた——によって分類することがイギリスへと導入され、年度毎に表に記録されることになった。ローソンはこれをもとにして1837年から39年にわたる3年間の統計を用いて犯罪と教育との関連を検討した²⁴。

フレッチャーは統計の時代のとりを飾るにふさわしく、国勢調査、所得税統計表、出生、死亡、結婚についての戸籍本署報告書、内務省による犯罪者一覧、救貧法委員会報告書、救貧法の報告書、貯蓄銀行の概要などの資料を駆使して道徳統計の分析をすすめたが、とくに犯罪をめぐって、教育をはじめとする変数との関係を探ることに、その力が注がれていた。その方法は一言で言えば、比較、総合、分析という統計解析とでもいうものであった。「積

み重ねられた結果をもとにしてひとつの一般化へとなだれ込むよりは、管理可能な集団のなかで事実を保持し、事実を介してひとつの階層を他の階層と、ひとつの地区を他の地区と、ひとつの時期を他の時期と比較することが望ましい。分析的そして総合的方法を相互に用いることで、いくつかの要素をあらゆる可能な結合へと持ち込み、その偶然の一致や関係の法則をみつけたり、あるいはより入念な観察に与えられるべき方向性に関しての新しい見地を得られることが望ましい。²⁵」社会を研究する人たちは自然科学者とは違い、実験に頼ることはできないし、出来事についてのかぎられた観察に、それも絶え間なく流動し、自分自身で統制できない観察に頼らざるをえない。したがって、自然科学者のようには実験に頼ることはまったく不可能だが、「事実を網羅的に数えあげることで、明確な階層あるいは地域である種の社会的要素が多かったり少なかったりすることを見つける手段を得る。これらの線での観察を増やし、比較のために調整された結びつきを増やすことで、次第に高度で間違いのない帰納へと到達する。²⁶」

もう少し具体的に述べると、国を8種類の地域に分割し、カウンティ毎に1841年の職業摘要の証拠にもとづいて分類し、さらには、それぞれの地区毎にその社会組織や人口の特色について、教育や道徳の状態について、結婚登録などを利用して分類をしている。それぞれの分割された地域のもとに含まれるカウンティは、たとえば教育に関しては、結婚登録簿にマークでサインした割合で特徴づけがなされている²⁷。「こうして蓄積されたデータは比較、分析され、表が作成されていく。これらのいっそうの分割の地理的広がりに対しては注意深い関心が払われるべきである。この手段によって、まず第一に、その社会組織に最大の影響を与える環境によって、第二には、人々の道徳的そして知的進歩のために直接働きかけることが、それぞれの部分に実りあるように積極的になされてきたことをある程度示している環境によって、王国を二重に分割することができた。これらの分割にたいして与えられる地理的アイデンティティは、結果を保持するための人工的記憶として役立つだけでなく、同じような問題を明確にするために、現在利用できる、あるいは

は間もなく利用できるすべてのデータの便利なインデックスとなる。というのも、それが基づいている環境は急激な変化を被るようなものではないからである。²⁸」

ここには統治が人口のこまごました状態を知識へと変換する様子がみてとれる。すなわち人口、人口密度からはじまり、産業従事状況、資産価値、結婚登録簿から推察できる教育状態、結婚と庶出、貧困、貯蓄、犯罪が一覧表に書き入れられている²⁹。先見の明のない結婚と教育、貧困と無知、貯蓄額と教育の程度、犯罪と早婚との連関などが、その表をもとに検討の俎上にのぼっている。ちなみに、フレッチャーによれば、貧困と犯罪は関係なく、首都や工業都市における人口の稠密と犯罪の間には関係があり、凶悪犯罪と無知とは密接に結びついている。「衛生施策やキリスト教教育による施設は、近代的ながやがやとしたところに棲む人たちを、農村に棲んでいたかれらの先祖にもおとらず肉体的にも精神的にも元気にし、道徳的にもする」としている³⁰。

このような知的技法とも言うべきものによって現実の出来事は相互に比較することが可能となり、相互間の関係もまた構成可能になる。この操作を通してはじめて現実には客観性を保証され、議論の対象となり、診断もまた可能になる。だから、統計はすこしも中立的に現実を表象しているわけでもないし、またイデオロギーによって現実が歪曲されて反映したものでもない。繰り返しになるが、統計自体が現実に働きかけるひとつの技法であり、問題を構成するひとつの技法であったということである。

個々の犯罪人の対象化

ところで、問題として構成されたのはマスとしての人口だけではなく、個々人もまた次第に問題構成されるようになった。対象化されたのはもはや専制君主や英雄ではなく、かつては記録の対象ともならなかった犯罪人であった。「犯罪統計についての調査をするために任命された委員会は、犯罪者が犯罪を

犯した前後の、その詳細な履歴を集めるための一連の表形式を注意深く準備した。この委員会は警察委員会と頻りに連絡をとっており、他の価値ある援助と情報といっしょに、その公的記録を調べるためのあらゆる便宜を供与されていた。³¹」犯罪人については、氏名、性別、年齢、職業から始まり、教育状態、家庭の状態、前歴、罪状、動機、目撃者、処罰など詳細にわたる犯罪記録書式が作成されるようになった。「以下に添付されている犯罪記録書式を提出するに際して、統計協会の目的は、今までに収集されてきたよりもいっそう詳細な犯罪者の特徴を、微罪裁判官、巡回裁判の書記、看守が得ることができるようにすることである。／その書式(177-178頁)は微罪裁判官あるいは法廷の前に連れてこられた個々の事例を記録することを目的としている。³²」こうした操作を介して個々人は問題として構成されてゆく。

「一般的な原因とはまた別に、特定の家族には犯罪の傾向がみられる。* 現在、ひとりの少年が再犯で裁判を待っているが、母親と兄はすでに流刑に処せられている。他の事例では、母親と息子が監獄に入れられ、他の二人の息子も流刑に処せられている。第三の事例では、少年は三度目の事件を起こし、父親と兄弟二人は海外へと追放されてしまっている。これから述べようとする最後の事例では、母親が数年前に重罪で裁判を受け、娘は続いて重罪で有罪判決を受け、息子も非行でしばしば投獄され、二番目の娘は重罪を犯した証拠を認め、三番目の娘はほぼ一年前から追放されており、四番目の娘と二番目の息子は同じような罪名でいま監獄に入っている。」

「*この事実はスコットランドの査察官報告書でもとくに記載されている。第三報告書129頁で、息子と一緒に殺人罪で絞首刑になったW.W.という男の事例が挙げられている。もうひとりの息子も犯罪を犯し、そのために牢獄船に送られた。釈放後、殺人に関与し、そのために絞首刑に処せられた。三人の娘もさまざまな罪状で処罰され、母親もたいへん悪い性格の持ち主であった。その家族は近隣の恐怖の種であり、報告

書によれば、幾世代かにわたってそうであった。ハミルトンやアーヴィンの犯罪人口を述べるに際しては、犯罪者数の大きな割合はたいへん少数の家族に属しているとも言える。この要因は明白であり、説明を必要としない。墮落行為へのもっとも強力な刺激はそのような家族において存在する。他方では、罰の恐怖はけっして習慣的な犯罪者をおしとどめることはできない。³³」

地図

統計表を利用することの他に、それに類するものであるが、刻み込むひとつの技法として、もうひとつ特徴的なことがある。ここでは紙幅の関係上掲載を割愛せざるをえないが、イギリスをその地域の特色によって特徴づけた表から、陰影をつけた地図が作成されたことである。それは調査のもっとも重要な部門を示すために作成されたものである³⁴。

「これらの地域は次の地図に盛り込まれる。その地図は次の表全体のキーとして役立つであろう。これらの表の縦の欄を上から下へと一瞥すると、陰影をつけられた高価な地図によって描き出されることのすべて伝えている。それは各要素が他と較べてどの程度際だっているかを示している。同時に、水平的な線は、なんらかの絵のような手段によって得ることができるよりも、いっそう簡潔に集団の結果を伝えている。³⁵」

さまざまな場所に棲む住人のありようを確かめるために、ひとつひとつの街路を踏査していき、地域の隅々から統計を収集し、地域、町、街路などの調査を実施することが、地図作製にはともなっていた。地図を作製することは、対象となる空間を統治にとって御しやすくするために、空間を表象するものであり、統治の技法のひとつである。統治が作動するためには、作動対象の空間を見えるような形にしなければならない。空間は格子状に区切られ、

区画され、2次元で位置づけられ、目盛りがうたれ、アイコンで印づけられ、陰影がつけられ、地図という装置によって表象される。地図というのは、そうしないと主観的な光景で瞬く間に終わってしまうものを対象化し、目立たせ、刻印し、保存する様式である。地図の作製過程で、ものごとが対象化され、安定し、目立った特徴が確認され、目立たない特徴は消失していき、ものごとが比較可能なものとなり、それにたいして働きかけることが可能になってゆく。だから、図表や地図は、どのように現実を見るかということ、他の人にたいして強いるための「知的な技法」である。私たちは力の多くを認知や理性へとしばしば帰せがちであるが、その力は実際にはちょっとした具体的な技法、たとえば図表や地図作製などに宿っているのである。地図が作製され、私たちが地図を鳥瞰的に見ることで自体が力のなせる技であり、そこには統治のまなざしともいうべきものが存在していることになる。「社会生活の統治のプロジェクトは19世紀に展開されたが、道徳的地勢図(topographies)の編み上げや、人口あるいは少なくとも人口のうち問題を抱えている人々についての統計的地図作製に依存し、そうすることを鼓舞した。³⁶」したがって、「まなざしの空間化は知識とその対象との間の権力関係を含んでいる。³⁷」まさに国内全土そして各地域が統治のもとに道徳地勢図に編まれてゆく。これもまた知的な統治技法のひとつであった。

教育の問題構成

こうして、道徳統計に典型的にみられるように、調査し、数値化し、書き入れ、図表そして陰影をつけた地図を作製するという、知的技法ともいうべきものを犯罪に適用することで、教育が問題として構成されていく。結婚登録簿などから引き出された様々なデータを分析すると、全体としての人口のなかで知育が不足しており、その証拠に、人々の移入によって影響を受けることが少ない種類の犯罪件数が割合的に多く、犯罪は道徳的頹廃を示すあらゆる指標を伴っていることが多く、また、知育の質量が乏しい場合は法廷へ

と引き出される犯罪者の割合が多いことがわかる。ブレッチャーは結論部分でこう述べている。

「23. したがって、結論はこうなる。教育は近代社会の安全保障には欠かせないものであり、そのような教育はしっかりとした、有用で、とりわけキリスト教的なものであるべきで、デイ・スクールのうち最も弱小のものによって与えられ、日曜学校のもっとも世俗的なものによって行なわれている教育の多くを凌駕すべきものである。

24. したがって、キリスト教学校は社会の道徳的向上のひとつの大きな手段であり、キリスト教徒でない人たちさえも、もっとも利己的な利害を考えても、支持すべきものである。³⁸」

ただし、教育はほかの変数と混じり合っているので、その影響を正確に測定することはできない、という留保をブレッチャーはつけ忘れてはいない。かれの予想に反して、いくつかの地域で犯罪者たちが一般の人々よりも良い教育を受けている、というパラドクスが目の前に突きつけられた際には、教育の指標として用いられた結婚登録の署名は「年少者たちの育ち」を反映しておらず、指標としての信頼性もない、とお払い箱にされ、その指標に代わって、教育の「量」ではなく「質」こそが、このパラドクスを解決するための指標として導入されてくる。

「(刑務所では無教育の囚人の割合が少ない場合があるが、)この事実の唯一の説明で、心に浮かんだものは、教育が広まっている地域でも、教育が広がっていない地域でも、それぞれで与えられている教育の量にとらず、質に違いがある、ということである。キリスト教の願いのなかで正しい生の目的にたいして唯一あがめられるものは、読み書きの最低限の能力によってテストできるよりも、もっと高度なものであり、若い人たちを注意深く育てることではない。……私たちの最良の教育地区

できえも広まりをみせているが、本当に有益な教育や本当のキリスト教の教育が適度に広まっているが、そのまわりには、知性にも、心にも何らよき効果をもたらさない、見せかけの学校教育が広がっている。鉱山そして工業地域と同様に、農業地域の僻地にも、この疑わしいぼんやりした状態が現出し、中産階級や上流階級の活気ある教育の優秀さを補償することはない。したがって、王国の一部の地域と他の地域との間の、ことばの合理的な意味での、教育の量のちがいは、結婚登録簿に「まったく書けない」と記されている割合で示されているよりも、いっそう大きいことになる。人口全体に関わって、不完全に読み書きできたり、「流ちょうに読み書きできる」人たちの監獄報告をチェックする、そういうテストはない。結婚登録簿や犯罪一覧ではまったく教育のない人数を確かめられるが、そのような比較から得られるよりも、全体としての人口における各カウンティ毎の知識能力の程度を調べるテストがあったならば、よい教育の方がよいのだ、とするいっそう強固な証拠を提供することになる。³⁹

「これらの地域で広まりをみせている教育は量よりも質の点でかなり違っているし、より教育ある僻地ではまったく教育を受けていない人が比較的多いことは、犯罪総件数がすくないことと直接に結びついている。」

「知育の量と同様に、優れた質が、全体の人口と比較して独立の手段をもっている人の優れた割合一致する。⁴⁰」

カレンは一貫して統計運動を階級やイデオロギーという視角から分析しているが、このパラドクスについてもまた同じ説明をしている。「再三再四にわたって、統計家たちは調査に乗り出していったが、その調査の主要な結論は予想できたものであり、先入観にもとづいたものであった。たとえば、政府の補助のために立法を可能にさせる以前に、マンチェスターとリヴァプールのデイル・スクールの児童数がどの程度ちがっているかを正確に知ることは、

ほんとうは必要ではなかった。調査のほんとうの目的は人口住民の状態を「事実」という手段で大衆に明らかにすることであった。⁴¹したがって、「フレッチャーやその他の統計家たちの結論はプロパガンダを事実として偽って提示した。教育の目的はひとつの階級をほかの階級の価値システムへと転換すること⁴²」であった。

カレンが言うところの「プロパガンダ」は言いかえれば教育への信仰であり、教育による進歩への信頼とでも言ってよいであろう。そしてそのイデオロギーを担っていたのは中産階級になる。ここでは進歩のイデオロギー、あるいはそれを担っていた階級という外部から説明がなされている。だが、私たちが長々と見てきたのは、イデオロギーの背後に階級の意志を読みとることではなく、統計、図表、地図などの、教育を問題構成する技法であった。技法そのものが教育を問題として構成する過程をみてきたのである。すでに述べたように、統計は教育という現実を写し取ったり、反映するものではなく、現実を問題として構成し、統治の領域に引き入れるものであった。とすれば、フレッチャーが教育の量から質へと問題構成を移したのは、イデオロギーというよりは、これもまた統計調査という技法を介してであった。たんなる読み書き算術のテストではなく、より深く教育へと分け入ることで、教育の質が問題構成されたのである。ここで忘れてはならないのは、フレッチャーが視学官であり、内外学校協会系の学校をかなり詳細にわたって調査していた事実であろう。この点については稿をあらためて論じる必要があるだろう。

統計と知

再び、統計と知との関連について立ち戻るが、道徳統計が目的としていたものは、ローソンが言うように、人間あるいは人間の心についての法則性を事実の積み重ねから発見することであった。そしてその法則にもとづき、外部の環境に働きかけ変化させることで、人間を統制する道がひらかれたこと

であった。道德統計のもっとも重要な部門は犯罪であったが、犯罪を分類と帰納によって、仮に正確な法則へと到達しなくとも、蓋然性が明らかになれば、最適な統治へと一步踏み出すことができたのである。

「道德現象はしっかりとした一般的法則に従属している。そのことを示すためになされたいくつかの試みにたいして、不当なあざ笑いが投げかけられてきた。物質的な現象に劣らず、道德的現象は特定の法則によって統制され、規定されていることが了解されるであろう。世界は普遍的で不易のシステムにもとづいて規定されている、とのことを科学は教えてきたし、日々の経験がそのことを証明している。……

人間はこれらの法則から除外されているわけではない。肉体、その組織的機能、その形成、成長、衰えはあらゆる点で、その他の自然の動物を規定しているのと同じ原理によって支配されていることは否定できない。これらの原則のいくつかはすでに発見され、説明されており、私たちからは隠されているが、それが普遍的に存在していることは、疑問の余地がない。……

……心はそのような法則に従属していることは否定できない。その機能が高度で独立したものであったにしても、そのエネルギーと多才さが大きいにしても、その力には限界があるにちがいない。さもないと、人は自然の秩序に楯突き、創造主がつくられた調和を乱すことになる。しかし割り当てられたスペースの内部できえも、心の衝動と傾向は同じものであり、同じ影響のもとにあり、同じ結果をもたらし、外部の環境によってのみ変わる。同じ精神的そして道德的現象は明らかに同じ要因から生じ、すべての条件の下で同じ結果を再生産する。——人間の行動には限界があるばかりではなく、法則もある、とみなすことは正当化できよう。……

……この知識は長期にわたる忍耐強い過程によって得られるし、分類や機能の結果であるが、それらは心とその作用を検討することにはほと

んどいままで用いられてこなかった。これらの手段の助けを借りることで、精神的ならびに道徳的現象は検討するのに越すことのできない障害を提示することはないであろう。それらを正しく吟味する手段や、あるいはこれらの手段を適切に適用する知識を身につけるには長い期間が必要だが、時代は進んでおり、道徳統計へのあらゆる寄与はこのアプローチを確固たるものにするであろう。

しかし万が一にも完全な科学に到達することができないとすれば、だが、広いそして繰り返される観察によって、ある種のつねに一定の傾向が確かめられ、発展してきたならば、蓋然性の証拠として理性はそれに満足し、立法家は思索をする道徳哲学者のたんなる前提や先験的理論よりも、安全で役立つガイドとそれをするであろう。

道徳統計のもっとも重要な部門のひとつは犯罪を犯すことと関連しているし、それは数字の計算にもっとも容易になじむもののひとつである。⁴³

私たちは人間とその活動について近代のカテゴリーでもって考えているが、そしてそのことに対してそれほど自覚的ではないのだが、ハッキングが言うように、近代のカテゴリーは超歴史的なものではなく、これまで見たように国家やその官僚機構が数量的データを大規模に収集する試みにその起源をたどることができる。ここでは犯罪についてこれまで見てきたわけだが、特に 1830 年代以降に犯罪統計が雨あられのように降り注ぎ、充分な統計数値が収集されると、そこに新しい概念が鑄られ、マス現象での不規則性はフェードアウトしていくことになる⁴⁴。犯罪統計が集積され、分類され、他の変数と関連づけられることで、それは人間の手によって手なづけられるようになったのである。統計は偶然を手なづけ、質的世界を知識へと変換し、統治に適するように分類分けし、人々が自らや自らの選ぶ途を考えるようにするものであった。「国民国家はその臣民を新たに分類し数え上げ、表に載せたのである。〈数え上げ〉[狭義には、人口の総数を明らかにすることを意図した「実

査 enumeration」の意味] そのものは現在でも、少なくとも課税と徴兵目的で我々の身近にある。ナポレオン時代以前には、大部分の公式の計測値は為政者により秘匿されていた。しかしそれ以降はものすごい量の数字が印刷され公開されるようになったのである。……

印刷された数字というのは表面的な出来事である。その背後には分類と計量のための新しいテクノロジー、そしてそのテクノロジーを行使するような権威と継続性を持った新しい官僚が存在していた。この新しい官僚によって作られた多くの事物は、それ以前には存在すらしていなかったと言っても誇張ではない。多くのカテゴリーが人々をきちんと数え上げるために発明された。人々に関する体系立ったデータの集積は、我々の社会認識の仕方だけではなく、人々を記述する仕方にも影響を与えている。我々が何を選ぶか、何をするか、自分について何を考えるのかが根底から転換してしまったのである。⁴⁵」

もちろん、ハッキングが強調するように、決定論が浸食され、統計によって偶然が飼い慣らされることで、新しい自由がもたらされたわけではない。統計の官僚は管理規則をつくるのではなく、人々が自らを、そして彼らに開かれた行為を考えなくてはならない分類枠組みを決めることで、押しつけたのである。非決定論の特徴は情報と支配という決まり文句であり、決定論が少なければ少ないほど、抑圧の可能性は大きいことになる⁴⁶。

道徳統計の衰退

私たちがここまでみてきた 30, 40 年代は統計が教育を構成した時代とも言えよう。だが、やがて統計運動はその結節点を迎えることになる。1850 年代にはいると、統計運動を推し進めてきた中心人物であるポーターとフレッチャーが亡くなり、運動自体もその勢いを急速に失ってゆく。社会統計がある特定の問題に集中しなくなり、道徳統計も減少し、些末な、それほど議論を巻き起こさない統計へと収斂する傾向が強くなった。

1850年代には、すでに問題構成されていた教育を変える必要が外から強く働いておらず、それほど強く意識されなかった、とも言えよう。カレンが言うように、1851年の教育国勢調査の目的と哲学は1830, 40年代の統計運動に典型的なものであるという点で、後ろ向きの文書であった⁴⁷。というのは、30, 40年代の社会闘争は50年代になって鎮静化し、初等教育にたいするキャンペーンの緊急性は失われたからである。教育をめぐる緊急の課題もなく、したがって、統治の力を教育に向けさせるインパクトがなく、問題構成されるべき対象がなかったということであろう。教育がもう一度違う視点から構成されるには、世紀末まで待たなければならなかった。

- 1 「統計運動の顕著な特徴のひとつは「道徳統 (moral statistics)」ということばの使用そのものである。それは19世紀のあいだに次第に姿を消したことばである。どういうことかということ、(いまここで検討している)私たちの時代にそのことばが人気を博していたことは、その運動のなかで道徳的先入観が大きな役割を演じていたことを強く示している。運動の中心にはひろがりをもった二つあるいは三つのテーマ、すなわち、教育、犯罪、そしてそれほど研究されてはいないが、宗教があった。」(M. J. Cullen, *The Statistical Movement in Early Victorian Britain: The Foundations of Empirical Social Research*, 1975, p.65.)
- 2 T. M. ポーター著、長屋政勝他訳『統計学と社会認識——統計思想の発展 1820-1900年——』梓出版社、1995年、31頁。
- 3 Ian Hacking, *Biopower and the Avalanche of the Printed Numbers, Humanities in Society*, 5 (1982), p.287.
- 4 イアン・ハッキング著、石原英樹、重田園江訳『偶然を飼いならす：統計学と第二次科学革命』木鐸社、1999年、110-111頁。
- 5 この経緯についてはM. J. Cullen, *op. cit.*, p.140参照。
- 6 かれは教育中央協会 (the Central Society of Education) の積極的な活動家のひとりであり、その活動が活発化していた際にも、再び犯罪と教育との関係というテーマに立ち戻ってくる。グリの説を論駁することが協会のキャンペーンにとって不可欠であった。(G. R. Porter, *Statistics of Crime and Education in France*, in *First Publication of the Central Society of Education*, 1837, p.317.
- 7 ローソンは1835年3月に英国協会へと入会したが、『ロンドン統計協会雑誌』第1巻で統計収集の役割について触れている。「統計調査がすべての目的のうち最良のものに、すなわち、私たち国民の状態の改善し、健康を増進し、災難と死亡(率)を減少させる目的に利用できるようにすることであった。」(*Journal of the Statistical Society of London*, Vol.I, 1839, p.444.)
- 8 M. J. Cullen, *op. cit.*, p.101.
- 9 *Moral and Educational Statistics of England and Wales*. By Joseph Fletcher, Esq., Barrister-at-Law, Hon. Sec., Statistical Society of London, [Read

- before the Statistical Society of London, present H. R. H. Prince Albert, 19th March, 1849.], *Journal of the Statistical Society of London*, Vol.X, 1849.
- 10 Nancy Ball, *Her Majesty's Inspectorate 1839-1849*, 1963, p.89.
- 11 *The Educational Expositor*, vol.I (1853), quoted by N. Ball, *Ibid.*
- 12 M. J. Cullen, *op. cit.*, p.101.
- 13 *Ibid.*
- 14 The Influence of Education, shown by facts recorded in the Criminal Tables for 1845 and 1846. By G. R. Porter, Esq., F.R.S., *Journal of the Statistical Society of London*, 1847, Vol.X, pp.316-7.
- 15 Nikolas Rose, *Powers of Freedom*, 1999, p.113.
- 16 イアン・ハッキング, 前掲訳書, 174 頁。
- 17 Ian Hacking, Biopower and the Avalanche..., p.281.
- 18 Statistics of Crime in England and Wales for the Years 1842, 1843, and 1844. By F. G. P. Neilson, Esq., F.S.S., &c. [Read before the Statistical Section of the British Association at Southampton, 15th September, 1846] *Journal of the Statistical Society of London*, Vol.IX, 1846, p.226.
- 19 Nikolas Rose and Peter Miller, Political Power beyond the State: problematics of government, *The British Journal of Sociology*, Vol.43, No.2, 1992, p. 182.
- 20 *Ibid.*, p.185.
- 21 *Ibid.*, p.182.
- 22 Moral and Educational Statistics.....By Joseph Fletcher, *Journal of the Statistical Society of London*, Vol.X, 1847, pp.193-4.
- 23 G. R. Porter, Statistics of Crime and Education in France, in *First Publication of the Central Society of Education*.
- 24 Enquiry into the Condition of Criminal Offenders in England and Wales, with respect to Education among the Criminal and General Population of England and other Countries. By Rawson W. Rawson, Esq., Honorary Secretary to the British Society of London, *Journal of the Statistical Society of London*, Vol.III, 1840. ポーター自身も犯罪を犯す確率を犯罪者の教育レベルと絡めて検討しているが, (The Influence of Education,....., *Journal of the Statistical Society of London*, Vol.X, 1847) 「より実際的なレベルでは報告書はたいへん不完全なものであり続けた。もっとも明らかな欠陥は裁判になった犯罪しか取り扱われていないという事実である。」(J. M. Cullen, *op. cit.*, p.73.) 「上記の事実は、首都のさまざまな地域住民の状態について精通している人たちに、おおくの考慮すべき問題を示唆することになる。ひとつの条件があまりに顕著であり、見過ごせない。すなわち、犯罪が頻発しているが、そのうちの多くの割合がセント・リュークス教区で起きており、その件数と特徴の両方にかんしてクラークンウェル地域のふさわしくない状態は見過ごせない。」(Police of the Metropolis [From Returns furnished by the Commissioners of Metropolitan Police], *Journal of the Statistical Society of London*, Vol. I, 1839, p.97.)
- 25 Moral and Educational Statistics....., By Joseph Fletcher, *Journal of the Statistical Society of London*, Vol.X, 1847, pp.194-5.
- 26 *Ibid.*, p.195.

- 27 結婚登録に際しての署名は教育程度を表すものとして、犯罪と関連づけて扱われていた。「どの地域で多くの知育あるいは少ない知育がなされているかを発見するために、この国ではこの時期に満足のいくテストがまったく用いることができない。しかし、利用できるもっとも最良のテストは戸籍本署の報告書が提供するものである。新しい結婚法の下では、結婚するあらゆる人は結婚簿に署名しなくてはならない。それぞれのカウンティの要約が作られてきており、その結婚簿に名前を署名している人数、マークで署名している人数がわかる。もし自分の名前で署名することができる個人を、かれが受けた教育程度の証拠となるものとして機械的にみなせれば、人口住民の教育程度によって、イングランドとウェールズのいくつかのカウンティを分類することが可能である。もっとも多くの犯罪が起きる人生の時期に、もっとも多くの結婚数があるという事実から、このテストはより価値がある。したがって、両方の事実は互いにもっと直接の関係にあるであろう。」(Statistics of Crime..... By F. G. P. Neison, Esq., *Journal of the Statistical Society of London*, Vol.IX, 1846, p.233.
- 28 Moral and Educational Statistics..... By Joseph Fletcher, *Journal of the Statistical Society of London*, Vol.X, 1847, pp.196, 203.
- 29 「これに加えて、私は2, 3の項目を追加した。それは、私が現在用いている資料のもっとも初期のものに先立つ30年間にわたる、各カウンティと地区の人口と犯罪の相対的進歩を示すものである。私がこのペーパーを始めてから、戸籍本署の第8年次報告書が公刊され、1845年の庶出と思慮のない結婚の報告を提供しているが、私のこれまでの事実を凌駕するというよりも、同じ表でそれらを単独で、あるいは結びつけてアブストラクトを作ることができるようになった。一方では無知の割合を、他方では独立した財産をもっている人の割合を示す項目と一しょに、それは同一の領域内でこれまでもたらされたものよりは、王国の様々な部分における他と比較した道徳状態についての価値ある証拠を提供する。」(Moral and Educational Statistics By Joseph Fletcher, *Journal of the Statistical Society of London*, Vol.X, 1849, p.165.)
- 30 Moral and Educational Statistics..... By Joseph Fletcher, *Journal of the Statistical Society of London*, Vol. XII, 1849, p.199.
- 31 Fourth Annual Report of the Council of the Statistical Society of London, *Journal of the Statistical Society of London*, 1839, Vol.I, p.6.
- 32 Forms for Registering the principal Circumstances connected with the Birth, Percentage, Education, and Condition of Criminal Offenders; the nature and probable Causes of their Offences, with the result of their Trial. Prepared by a Committee of the Statistical Society of London, *Journal of the Statistical Society of London*, 1839, Vol. I, p.175.
- 33 Annual Report of the Rev. John Clay, Chaplain to the Preston House of Correction. Presented to the Visiting Justices at the October Sessions, 1838, *Journal of the Statistical Society of London*, 1839, Vol.II, p.88 and footnote. 「フランスの警察規則では、裁判官はイングランドでそうであったよりも、法廷に引き出された人間が辿った人生のコースをよりよく辿ることができる。フランスでは犯罪報告を準備するに際して、以前に刑罰を受けた犯罪者を区別するのに、かなりの労力を用いてきた。これはその問題でもっとも重要な部門である。一度誘惑に負け、社会の法律を破った人たちは、正しい振るまいにはふさわしくない

環境に置かれており、有徳の道に立ち返ることはほとんどできないし、困難である。イングランドでは犯罪行動を追及されるのに時間を費やしたり、あるいは裁判官によって課せられた刑罰を受けるのに時間を費やしたりする多くの階層がいることを知っている。しかしこれらの職業的犯罪者がコミュニティのなかでの犯罪総数にたいしてどの程度の割合かを確認する手段を私たちは持っていない。フランスでは、各個人は簡単に迎えることができ、その以前のキャリアが正しく確認できる。以前に刑罰の対象となった犯罪者の知的状態は1831年以前の司法官の報告では記されていない。しかし当該年とその後3年間は再犯にかんするあらゆる特徴が詳細に記されている。毎年約平均1,061の再犯のうち、教育ある人たちの年平均は14のみで、王国の住人2,300,000人に1人の割合である。」(G. R. Porter, *Statistics of Crime*....., in *First Publication of the Central Society of Education*, 1837, pp.324-5.)

- 34 Moral and Educational Statistics..... By Joseph Fletcher, *Journal of the Statistical Society of London*, Vol. XII, 1849, p.166.
- 35 Moral and Educational Statistics..... By Joseph Fletcher, *Journal of the Statistical Society of London*, Vol.X, 1847, p.195.
- 36 N. Rose, Calculable minds and manageable individuals, *History of the Human Sciences*, Vol.1, No.2, pp.184-5.
- 37 N. Rose, *Powers of Freedom*, pp.36-7.
- 38 Moral and Educational Statistics..... By Joseph Fletcher, *Journal of the Statistical Society of London*, Vol.XII, 1849, p.234.
- 39 Moral and Educational Statistics..... By Joseph Fletcher, *Journal of the Statistical Society of London*, Vol. XI, 1848, p.346.
- 40 Moral and Educational Statistics..... By Joseph Fletcher, *Journal of the Statistical Society of London*, Vol. XII, 1849, p.152.
- 41 M. J. Cullen, *op. cit.*, p.146.
- 42 *Ibid.*, p.144.
- 43 An Inquiry into the Statistics of Crime in England and Wales. By Rawson W. Rawson, *Journal of the Statistical Society of London*, Vol.II, 1839, pp.316-9.
- 44 Ian Hacking, How should we do the history of statistics? in Graham Burchell et al. (eds.), *The Foucault Effect*, 1991.
- 45 イアン・ハッキング, 前掲訳書, 5頁。
- 46 Ian Hacking, *op. cit.*
- 47 M. J. Cullen, *op. cit.*, p.69.